

「法度」と「法躰」

高田 友

「法度」は「はつと」、「法體」（僧侶の姿）は「ほつたい」と讀む。「はつ」と「ほつ」、かかる發音の齟齬、抑々いづくよりか來たりし。

また、「法」の字、單獨にては發音は「ホウ」。通常、促音便の生ずるは、「學校」「脱退」の如く、二字熟語の前の字「く」（學）または「つ」（脱）にて終れる場合に限らるるに（例外あり）、何爲なんすれぞ「う」にて終る「法」なるに促音便を生ぜしむるを得べけむ。

さは、「法」の準據せる古代中國語の發音の差異より生じたるなり。

字音とは「漢字の音讀みの歴史的假名遣」の謂ひなれど、これに「漢音」と「吳音」あり。

「漢音」は「漢字の本朝に渡來せし砌の長安・洛陽に於ける發音を日本風にモディファイしたる音」なり。

片や、「吳音」は、長江河口周邊の吳の地方の發音に準據す。

吳音は漢音に先行して導入せられ、佛教傳來（西紀五三八年）の頃より徐々に分散して本朝の人の知る所とぞなりし。吳音の大據渡來せるは六世紀の儀なりきと斷じても大過なかるべし。

翻つて見れば、漢音は遣唐使（六〇〇年以降）初期に一括して齎されたる所なれば、體系的なる秩序あり。

八世紀（奈良時代）の本朝にては、漢音と吳音、並行して用ゐられたれど、七九二年、桓武天皇「漢音獎勵の敕」を出したまひて、「可成かなれば漢音を用ゐるべし」との由なれば、以後公式文書は悉皆漢音にて讀まるるに到る。三種神器の「神器」、廣く讀まるるは「じんぎ」（吳音）なれど、公式文書にては「しんき」（漢音）なり。明治の皇室典範第十條、「天皇崩スルトキハ皇嗣即チ踐祚シ祖宗ノ神器ヲ承ク」の「神器」も「しんき」と讀まれよかし。

總括して言へば、佛教用語・神道用語は吳音にて讀む「多し」と理解せられたし。「園城寺」は漢音を用うれば「ゑんせいじ」なれど、吳音にて「をんじやうじ」と讀むが正讀なり。

偕、萬葉時代の發音には、現代人の目より見、耳にて聞けば、奇怪なる所尠すくなからず。

その一は、ハ行音「はひふへほ」を「パピプペポ」(pa,pi,pu,pe,po)と發音したるの條なり。而して、**フ**の音は存せざりき。

「破」の字の皇朝に齎されたる時、唐土にては **pa** と讀みたりしかば、本朝にてはこれをしも「は」(**pe**)を以てぞ受けたりける。また、「屁」は震旦にて **pi** なりければ、「ひ」を宛てたるは異とするに足らず。「放屁(はうひ)」は當時の長安洛陽にては **pangpi**、それを受けたる本朝萬葉時代の音は **paupi** なりけり。

愉快なり、「屁」の字訓「へ」なり。萬葉時代の發音「**ぺ**」(**pe**)なりとは察せられたし。本朝にては **pe**、震旦にては **pi** なりければ、宜^{むべ}なるかな、さは屁を發する時の音とは知るべし。寔^{まこと}にこれ擬聲音にあらずんばあらざるなり。

因みに、萬葉時代には、「光」は「ピカリ」(**pikari**)なりけり。些か驚かであるべしや。

抑々、いづこの國に於ても、時世^{ときよ}とともに發音また遷ろひもて行く。英語にても、「い」かんが **knife** をナイフと發音する」とは我儕^{われ}の訝る所なり。豈圖らむ、中世には、スペリングのままに「クニーフェ」とこそは發音したりけれ。然るに、或る時期「語頭の **kn** の **k** は發音せず」てふ「大變動」出來し、**knife** も **knee** も **knock** も **know** も一齊に **k** を發音せざるの儀とはなりたりけり。語頭の **ps**、**p** を讀まざるも同斷なり。Psyche はギリシャ神話の美少女プシュケ(「魂」の意)なれど、英語にてはサイキとなむ發音せらるる。因みに **psychologist** 「サイコロジスト」は「心理學者」の意にして「賭博師」にはあらざるなり。

日本語にても相似^{あい}たる現象見らるるを注視すべし。平安初期に、「はひふへほ」の「**pa,pi,pu,pe,po**」より「**fa,fi,fu,fe,fo**」に變はりたるはその一例なり。^{しかのみならず}加之平安末期以降、この「**ファ・フィ・フ・フェ・フォ**」、語中語尾にては「**ワ・ウィ・ウ・ウェ・ウォ**」、さらには「**ワイウエオ**」に變はりたるの「あり。

英語にて「屁」を **fart** と謂ひ、古代ギリシャ語の **perdein** に由來すとの由。ここにても、**p** の **t** に移り行く世界共通の子音變遷の例を見るべし。また、古代日本語 **pe**、古代中国語 **pi** と同じく、抑々の發祥、擬聲音とこそは察せらるれ。

「ひかり(光)」の「ひ」は語頭にあるがゆゑに **フ** の音(萬葉時代 **pi**、平安時代 **bi**)を維持せしかども、「平(たひら)」の「ひ」は語中になれば、**wi** ないし **i** に變はり、「たウイラ」「たいら」とぞ移ろひける。(tapira ⇄ tafira ⇄ tawira ⇄ taira)

「戀(こひ)」の「ひ」も語尾になれば、**pi** ⇄ **fi** ⇄ **wi** ⇄ **i** となり、「こい」なる發音の生じたりけり。

なほ、ㄱ 音の生じて、「光」の hikari と發音せらるるに至りたるは江戸期に入りて後の儀なり。

この變化を「ハ行轉呼音」とは呼稱す。

今一つ、興を惹かるる變化あり。母音の發音の變化にして、格別に之を指稱する名はなきが如くなれど、英語にも十三世紀の頃に出來せる甚だ近似する變化あり、「大母音推移」てふ名を得たりき。日本語の平安・鎌倉・室町時代の母音發音の變化も、今假に、それに合はせて「大母音推移」と呼ぶを許したまへ。

因みに英語の「大母音推移」とは、ape (アーペ⇒エイプ)、pile (ピーレ⇒パイル) の如く、e の前の母音はアルファベット読み (アーならでエイ、イーならでアイ) にといふがその一例なれど、剩へ、au のアウ⇒オー (automatic) 、eu のエウ⇒ユー (neutral) など、重母音⇒長母音の變化も忘るべからず。

日本語の「大母音推移」のうちにて重要なは、英語と同じ「アウ⇒オー」なり。

これによりて、「堂(dau)」は「do:」(do:にあらず)とは變化せり。

さて、冒頭に述べたる「法度」「法體」に戻らむ。

「法」は漢音「はふ」、吳音「ほふ」。各々發音は如何にと問へば、古代中國音にては pap, pop、萬葉語にては papu, popu。

「法度」の「法」は漢音にて「はふ」。「法體」は佛教用語なれば其の「法」は吳音にて「ほふ」。「はふと」「ほふたい」、おのがじし促音便を起こしたるに由り「はっと」「ほつたい」に變じたりとは察したまへ。

「學校」「脱藩」の如く、促音便を起す事例に於ては、上の漢字「く」「つ」にて終ること多し。「ガク gaku」、「ダツ datu (datsu)」の語尾は母音をはづせば k, t なり。k, t, p の音は破裂音と言ひ、いはば「強き音」なり。すなはち促音便を起すに適したるなり。

gakkau, daupan となれば、促音に近附きたり。

而して、既に察せられたらめど、法は「はふ」にせよ「ほふ」にせよ、元來、p なる破裂音にㄱ の附屬せる而已。然則、「法度」は「はふと paputo / pauto」の促音便に據りて「はっと」となり、「法體」は「ほふたい poputai / poptai」より「ほつたい」とは變じたりき。

古代の發音を現代音より推察する作業、また樂しきかな。

(令和六年十一月二十日受附)